

古代建築の研究と復元の最前線

—日中韓建築文化遺産保存国際学術会議から—

はじめに 平城遷都1300年にあわせて復元された大極殿は、その設計にあたり、日本のみならず、中国、韓国といった周辺の国々の事例も参考にされた。日本の古代建築研究における東アジア地域の事例の重要性は、もはや述べるまでもない。

奈良文化財研究所では、中国文化遺産研究院発展研究所（前・中国文物研究所）、韓国国立文化財研究所とともに、建築文化遺産の研究とその保存に関する共同研究を進めている。2009年度からは毎年各国で、建築文化遺産保存国際学術会議をおこなっている。第二回目となる2010年度は、平城遷都1300年、第一次大極殿復元にあわせ、「古代建築の研究と復元」をテーマに、奈良文化財研究所において、2010年9月3・4日の2日間にわたり開催した。当日は、学界、官公庁、一般の各方面から100名以上の方々のご参加を得た。

鈴木嘉吉（元奈文研所長）による基調講演につづき、3つのセッションにわけて各国が研究発表をおこない、最後に総合討論をおこなった。

まず基調講演においては、これまでの復元研究においても、各国の事例を参考にしてきた経緯、各国に遺存する復元参考資料の特色が述べられ、さらに個人研究に留まらない組織的な共同研究の必要性が訴えられた。

以下では、「遺跡における建築復元」「発掘遺構による古代建築研究の最前線」「現存建築等による古代建築研究の最前線」の3つのセッションについて、それぞれの発表と討議の概要を記し、今後の研究の指針としたい。

なお「復元」の用語については、「復元」・「復原」が



図48 シンポジウム総合討議風景

ともに用いられたが、本稿においては、便宜的に前者で統一した。

遺跡における建築復元 石造物に比較して、地上に残りにくい木造を中心とする建築文化は、東アジアの共通点である。本セッションでは、日・中・韓の3カ国における、復元のあり方とその研究の方法について、総合的な視点から発表、討議がおこなわれた。

まず島田敏男（奈文研）から、日本の文化財保護制度における復元の位置付けが紹介されるとともに、遺跡における復元の是非を問う議論の問題点が示された。

つづいて金 徳文（韓国国立文化財研究所）から、皇龍寺復元整備事業の事例を中心に、復元整備に関する議論の変遷と復元研究の現況が紹介され、政治的・社会的な背景からの復元に対する強い要請と古い遺構がない韓国における復元の困難さが示された。

潘 陽（中国文化遺産院発展研究所）からは、復元再建に関する法的状況、技術的な課題が紹介された。また技術書として、宋代『營造法式』、清代『工部工程做法』が存在することが、復元の大きな手掛かりとなる一方で、見積もりを目的に作成されたこれらの文献資料の限界性が示された。また「修復」「復元」といった用語について、各国の用法の共通認識をつくる必要性を訴えた。

日本における復元行為の是非を問う議論、韓国における真正性を問う議論、中国における原位置での復元の是非を問う議論の存在があきらかにされた。その議論の中心はそれぞれ異なるものの、復元行為そのものに関するどの国でも起こっている議論であるだけに、各国の対応が参考になる。さらに広い国際的な状況でみた場合、3カ国が抱える共通性は際立つものとなろう。国際舞台における理論的な連携の可能性をみせた。

また復元設計に関しては、その行為自体がもつ限界性に対する認識と、対応策について意見が交換された。

発掘遺構による古代建築研究の最前線 3カ国とも、現存遺構に限りがある古代建築の研究において、発掘調査による新たな知見は、非常に重要な意味をもつ。本セッションでは、各国の最新の成果、失われた建築に対する理解のあり方が述べられた。

まず大林 潤（奈文研）から、古代建築の復元における有力な根拠となる建築構造を保ったまでの出土事例として秋田県胡桃館遺跡、山田寺回廊を、近年の発掘成果

として西大寺薬師金堂の凝灰岩を用いた地業、新薬師寺金堂跡を紹介し、つづいて第一次大極殿復元の復元プロセスとその根拠が示された。

つづいて韓 旭（韓国国立文化財研究所）からは、これまでの復元研究史が紹介され、つづいて近年の発掘調査について詳細な報告がされ、地業や礎石据付法にみる百濟・新羅の差や、柱配置や基壇と上部構造を結びつけた研究などの事例が示された。

劉 江（中国文化遺産研究院）からは、やや視点を変えて、カンボジアのアンコールにおける石造建築遺跡の修復事例として、報告者が携わったチャウ・サイ・テヴォーダが紹介された。石材が散逸するほど破壊がすすみ、基壇の一部が原位置を保っていたにすぎないものもあった遺跡を、どのような理念、方法で復元したのかが示された。

日本、韓国による近年の発掘事例の建築的な解釈は、古代建築研究のさらなる可能性を示すものであると同時に、情報の共有の重要性を痛感させられるものであった。

また中国によるチャウ・サイ・テヴォーダの復元事例は、多くの国が修復活動に参加するカンボジアにおいても特殊な事例であり、国際的な舞台における東アジアの修復手法を見つめなおすものとなった。

現存建築等による古代建築研究の最前線 古代建築の復元では、現存遺構の検討は欠かせない。本セッションにおいては、現存遺構による復元研究の成果と、その過程で深まった現存遺構への理解について、発表、討議がおこなわれた。

はじめに、清水重敦（奈文研）からは、第一次大極殿の復元設計のプロセスが紹介され、つづいてその過程で生れた問題意識として生れた、古代建築の構造システム論、立・断面寸法計画論、部材長—建物規模関係論が示された。

つづいて姜 賢（韓国国立文化財研究所）からは、韓国における古代建築研究史、特に1990年代以降の古代建築復元事業の増加とともに研究の活性化の状況が紹介された。その中で、現存遺構の中により古い技法の存在を探る研究、発掘資料・実測資料の体系的な把握、出土建築部材や絵画資料など二次資料の収集をおこなっている現況が示された。

温 玉清（中国文化遺産研究院）からは、唐・長安城の大明宮含元殿の復元に関する研究史が紹介された。さらに

大明宮の配置計画の特徴、含元殿のもつ門闕形式の歴史的意義、含元殿の柱配置が北朝の建築と、同じく大明宮に建つ麟德殿の柱配置が南朝の建築と共通点を持つことが示された。

3カ国とも、復元研究の過程で古代建築研究が進展した様子が示された。清水は「かたちの研究」から「つくる研究」への転換を見出したと述べたが、各国において同じ状況があるといえよう。

おわりに 最後におこなわれた総合討議においては、各國発表者から、他国の発表に関するさらなる情報を求める意見が多かった。

また発表の中で提議された各国における「復元」「修復」といった用語の概念について、伊藤延男（神戸芸術工科大学名誉教授）より、東アジアの視野におさまらず、英語の概念・用法による一步引いた立場からの整理の必要性が訴えられた。

木造を中心とする建築文化をもつ3カ国は、大きな問題意識の共通点も多い。また同時に、現存遺構の遺存状況、文献史料のあり方、発掘遺構による新たな成果など、各國における研究の力点の置き方の違いも、浮彫りとなった。

冒頭にも述べた通り、古代建築研究において、東アジアを視野にいれることは、すでに当然といっても過言ではない。各國において、当たり前なことが、別の視点から眺めることで、新たな意味づけがなされることも多い。最新の情報を共有することで、現在進行形の調査・研究に反映することができれば、古代建築研究において大きな一歩となるであろう。

また復元という行為をおこなう3カ国とも、復元に関する自国の文化財保護行政と国際的なスタンダードの間に相違点があることを認識している点においても共通している。さらなる議論の蓄積が求められる点である。

なお本稿で紹介した各発表については、『古代建築の研究と復元 第2回 日・中・韓建築文化遺産保存国際学術会議予稿集』（奈文研、2010）に掲載されているので、参照していただきたい。

末筆となつたが、シンポジウムの開催にあたっては、崔ゴウン（竹中大工道具館）、韓 志晩（国立歴史民俗博物館）、李 鎮栄（龍谷大学大学院）、楊 欣（奈良女子大学大学院）、李 喰（東京大学大学院）の各氏に、多大なる協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
（鈴木智大）